

会 議 議 事 録(抄)

会議名	専門学校東京テクニカルカレッジ 第二回 学校関係者評価委員会
開催日時	平成 29 年 11 月 22 日 (水) 18 時 00 分～20 時 00 分
会場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下 1 階 テラホール
参加者	外 部 委 員 : 10 名 (委員の氏名・所属等は別添資料参照) 学内関係者 : 12 名
配布資料	① 式次第 ② 参加委員名簿 ③ 前回議事録 ④ 平成 29 年度学校関係者評価の概要 ⑤ 平成 29 年度第二回学校関係者評価委員会 PP 資料 ⑥ RJPPAPER ⑦ ディプロマポリシー (素案)
会議録	1. 開会の辞・事務局紹介 (事務局) 専門学校東京テクニカルカレッジ白井副校長の司会により開式が宣言され、配布資料の確認が行われた。 2. 学園側関係者挨拶 学園側の関係者として、専門学校東京テクニカルカレッジ高瀬恵悟校長より挨拶が行われ、「他校の学校関係者評価委員会などにも参加する機会があり、会議の運営についてもそれぞれに違いがある。またコンプライアンスなどについて社会的に問題となっている。いずれも形式的になってしまっている意味がない。いただいたご意見はしっかりと時間をかけて解決していきたい」とのコメントがあった。 3. 委員紹介 白井副校長より出席者名簿に基づき委員の紹介が行われた。 4. 議長ほかの選出 本会議の議長については副会長渡辺委員が、書記としては小野寺委員が引き続き選出された。尚小野寺委員が欠席のため事務局にて書記を代行した。 5. 開催要件の確認 議長より本会議の出席状況について確認指示があり、事務局より委員 28 名中 22 名の参加があり、本会が成立していることが確認された。 6. 議事 (1) 第一号議案：平成 29 年度第一回会議議事録の確認 (2) 第二号議案：前回の指摘事項とその改善点 (本年度に改訂する自己評価報告書への加筆事項確認) 議長は事務局に対し、前回議事録の確認ならびに指摘事項の改善等についての説明を指示。事務局側では資料③および④に基づき議事録の説明と、第一回学校関係者評価委員会での指摘事項の改善状況と自己評価報告書加筆事項について説明を行った。その後議長はこれらに対する疑義について出席者に図ったところ、全員一致で議事録ならびに自己評価報告書への加筆事項に齟齬がないことが確認された。 (3) 第三号議案：29 年度取り組み進捗状況報告 取組全体の説明項目について白井副校長から紹介ののち、報告が行われた。 ①基本方針：高瀬校長 ・学科 PR については各科の売りをより明確に打ち出していく方針を継続する ・総合研究科については引き続きにニーズの確認を実施 ・エンロールメントマネジメント継続 ・海外連携継続、ベトナム研修の具体化 ・RJP 活動の継続 ・各科ディプロマポリシー (修了要件、卒用要件) の策定 文科省は「入口、教育、出口」が明確でないために就業に関するミスマッチが生じているので、この三つを明確に打ち出すことが必要であると考えている。これに率先して取り組み他校との違いを明確にしていける。 ・就職内定状況 昨年度 93%⇒90% やや悪化。 留学生が苦戦 ・出席 昨年度 92.2⇒93.4% わずかに改善。 ・退学 昨年度 3.4%⇒3.6% わずかに悪化。 一部留学生の問題など、防止対策強化する ・専門職大学については動向を見極める ・学生募集は堅調で昨年並みの状況 ・建築科カリキュラム変更の継続 ・校舎リフレッシュを随時実施 ②厚生労働省委託事業に関する報告：高瀬校長 ・文科省 新卒者をビジネスマンとして育てる⇒ディプロマポリシー ・厚労省 30～40 歳代就職氷河期で就職できなかった人材の再就職⇒リトライプロジェクト

45 歳以上の人材に+αの技術を身に付けさせて再就職させるための講座を開発する(3 年計画)
今年度はアンケート、ヒアリング調査を実施。来年度以降講座の開発と実証。再就職先検討。

③ディプロマポリシー策定に関する報告：白井副校長

- ・文科省の三つのポリシー（アドミッション、カリキュラム、ディプロマ）の説明と策定の意義について
- ・昨年度アドミッションポリシー策定⇒入学のためのコミュニケーションツールとしての利用を想定。オープンキャンパス等でも利用。
- ・ディプロマポリシー策定方針。単なる資格や理想論ではなく具体的な表現とすることとし、教員の意見を集約して「〇〇ができる」と表現した。

④リアルジョブプロジェクト（RJP）に関する報告：白井副校長

各科の継続中の取り組みについての説明が行われた。

(4) 第四号議案：審議（取り組みに関する意見交換）

議長は今回の説明、取り組みについて各委員に意見を促し、また事務局からもどのようなものでも良いので発言いただきたい旨要請があった。以下に発言概要を示した。

澤坂委員：三つのポリシーで学校の売りを明確にしていくことは良いが、広報媒体はどうなっているのか？情報系キーワードで検索しても当校はかなり下の方に出てくる。内容は見てもらえるとよいが、問題は目に触れていないということ。

高瀬校長：情報、建築系は競合校が多く埋没しがち。例えば日本電子、中央工学校、青山製図は名前から内容がわかりやすいが、我々は絞り込んだ広報展開ができないため、効果的にアナウンスできていない。教育内容重視で自分を外部に示すことを怠ってきたと言える。これが学園全体としての問題点である。

広報が弱く外部とのパイプも不十分であるのが現状。

澤坂委員：時代によって高校生が見るものは変わってきている。高校から取るということであれば、今の高校生が何をみているのかリサーチして、新しい展開をすればどうか。

大沼委員（保護者）：建築とインテ 1 年に姉妹で通っている。二人ともこの半年休まず通学している。一人は手書きで設計図を描いたり、コンペにも挑戦すると頑張っている。

もう一人はインテリアコーディネーターの一次も受かっている。二人ともこの半年で身につけていることがたくさんあると実感。

就職のことも話題となってきた。指導よろしくをお願いしたい。

萩原委員（保護者）：ほめるというお話があったが、通学している長女の弟が高校生であるが、その先生も総じてやさしい。「ほめる」というスタンスでの教育をお考えと思うが、もう少しお尻をたたいてもらっても良いかと。生徒はお客さんとは違うので叱咤、激励していただきたい。

安藤委員（保護者）：高校 3 年ということではなくさらに前、1 年 2 年の段階で PR することが必要。私は子供の友人の親から当校のことを知らされた。

来年の小笠原研修、ベトナム研修にも非常に興味がある。

今野科長：最近では高校 1、2 学年生に対するガイダンスなどにも参加している。

ベトナムは治安の面やその他の状況から学生の研修先として良いのではという提案を受けたことが発端。日本に対してベトナムの若い学生は興味を持っている。現地の大学も日本の学校との交流を期待している。現地の水処理関係には日経企業が多い。

今回訪問して総じて感触が良いので、実施に向けて進めていきたい。

樋口委員：中野地区の開発が進んでいる。中野区建築家協会なども区に対して参加を提案している。

東中野駅の改築案も出ている。明大中野高校前の桜の木の伐採問題などもあり、建築の学生に地元との関連のある課題を与えてもらえればと思う。

中山委員：ディプロマとかアドミッションとか固い言葉が出てきたが、いろいろ細かく考え、努力されていると思う。そのようなカチッとしたりやり方の中で私が良いと思ったのは、仕事になったときに勝つための方法論を学ぶことで、RJP はそれに当てはまるのではないかと。

学生がどこまでできるかであるが、彼らの世代が持つ文化があり、その意見を取り入れながら、リアルタイムで変化していくキーワードを得ることができる。

学校の授業の中でこれがやれるのは良いのではないかと。これをする事で目標が見える。

目的がはっきりしていく。このようなことを学ぶのには良い機会なのではないかと思う。

大塚委員：ディプロマについて各科のポリシーを見てみると、監督科は企業の求めるものを基にシステムチックに作っている感じ。一方建築科は、設計できる、〇〇できるという表現で、やや違和感がある。ディプロマは企業との間をつなげるという意識もあるところが大事かと。

この中では、環境テクノロジー科の〇〇のバックグラウンドができているという表現は良いと思う。

先ほど中野の再開発の話があったが、町はどんどん変わっているのに建築の人气がなくなっている。時代によって若い人が何をやりたいかは変わってくるが、建築の魅力を伝えるような言葉をいれてほしい。

かつては怒って鍛えて働かせる。言葉の上でやさしく指導するとしても、活性化をどうさせるか。自分で考えて自分で行動していくという視点を持たせるようにやっていくことができれば、厳しくても優しくても同じかと。

杉山委員：テラカフェとかエントランスが広いので、例えばここでのイベントを学生に考えてもらう。リアルに来てもらうものとネット上で見てもらうものの二種類の手法があると思うが、学園祭と卒業制作発表会だけではなく、例えば今回は〇月〇日に高校三年生をこの場所にたくさん呼ぶ。次は中学三年生を呼ぶ…といった年間を通した目標設定を学生に考えさせる。学校側が考えても多分人は集まらない。彼らは何か感じてここにきているはず。彼らに考えてもらう。お金であるとかその他の指導はやるとしても、学生にプロモーションの中心を担ってもらう方が早いのでは。

また、競合他校のキーワードを web に入れてしまう。これぐらいはやってもよいのでは。リアルジョブプロジェクトとして、技術以外のところが身につくのではないかと思う。

立田委員：皆さんの発言から、ディプロマポリシーと学生募集のところが問題となっているのかと思う。ディプロマポリシーについてはスケジュールが出ていたが、その他はどのようにすすめていくのか？

白井副校長：アドミッションについては昨年設定。来年はカリキュラムポリシーを作成しながらシラバス、コマシラバス、授業シートを作り直したいと考えている。

これは次年度以降も毎年見直しをしていく。PDCA を繰り返していく。

立田委員：このポリシーについては発信していくのか？

白井副校長：HP 学園の理念の後に掲載する。ただこれらは固まったものではなく、常に見直していく。それを随時発信し続けていく。

立田委員：ぜひ発信していただきたいのと、それを広報とうまく絡めることができればよいと思う。

高瀬校長：

- ディプロマポリシーも時代の変化で変わっていく。今年作ったものが完成形ではない。企業の方のご意見もうかがいながらさらに変更を続ける。重要な案件であるので、来年度も改めて提示させていただき、改善を続けていく。
- 学生の教育に関してもぜひご意見いただきたい。
我々は各分野の出身であるので、学生に対し社会人としての常識で注意をする。社会人が社会人をしかる。高校までは校則と違うといって叱られていた学生は、カルチャーショックをうけるのではないか。意識が幼い学生が入ってくる。また留学生は日本の社会にまだ溶け込んではいない。繊細に扱う必要がある学生がいる。このような学生とどう向き合うのか。これは重要なテーマ。
- 広報に対するご意見にあったように、RJP で学生を有効に使っていききたい。
RJP はまだ実情は我々が準備したお膳立てに沿って何とか形になっているといえるが、次第に学生からのアイデアが出てきている。前向きになってきている。これを広報に生かしていく。
学生に学校の広報活動をやらせることには内心抵抗があったが、学生自身はそうでもない様子。学校の活動を広く告知するための広報であるとの位置付けで進めたい。
- 第 27 回目の建築・インテリアヨーロッパ研修を実施する。今年はイタリアに行く予定。
現在すでに 26 名の希望者が出ている。安全に配慮して進める。
- 高校三年生未満の学年に対する活動も行っているが、例えばここ 10 年ほど中野区のある中学校に行くとガイダンスを行っているが、中野区から入ってくる子はいない。他校に行ってしまう。
高校では現在 1 年次から進路指導をスタートするようになっている。そこに参加はしているものの、学校名を強く謳えないのが実情。工業離れが進んでいるため、まずこの分野に興味を持たせる説明までで、なかなか学校そのものの宣伝に至らない。
高校の先生方は基本的に大学出身であり専門学校のことを知らない。高校の先生に工業系専門学校の魅力を伝えるツールとしてディプロマポリシーを生かせればと考えている。ただこれは固いので、高校生にどのように伝えていくのが課題。

白井副校長：

教育と募集が別々になっている。今我々がやっていることと募集がリンクしていないことが問題。努力はしているが、ぜひ解決策が欲しい。

またイベントをやるにしても、学科の種類が多いために一つひとつは弱いものになってしまう。外部環境としては大学進学がより容易となり、高校の指導も大学進学を第一としている。景気改善により夜間課程の募集も苦戦。工業高校も就職が良いため専門への進学が減少。このような状況ではあるが、募集と教育の一体的な高度化を目指して努力を継続する。

渡辺議長：今までの説明に対しての学校関係者としての評価ですが、教育観点からの改善アプローチであり、テクニカルカレッジらしい取り組みがなされていると思います。今後の活動や改善努力の進捗、取り組み内容について公開をよろしく願いたい。

	7 次回日程について（事務局） ・3月14日（水）午後 卒業研究製作およびRJPの発表会を予定している。 ぜひご参加いただきたい。 以上
--	---

議事録署名人

印

印